

## 三人のアイドル

\*この小説はフィクションであり実在する団体・人物とはいっさい関係ありません。

### 第三章 妄想は実現されないからこそ妄想なのである



彼女は目隠しをされ、両手を後ろ手に縛られ、俺の足下にうずくまっている。紺色のブレザーの肩がかすかに震えている。襟元をきちんとした真白いブラウス。校則に則った膝丈のチェックのスカート。白い木綿の靴下。見るからに優等生的な制服に包まれた、身長168センチ、体重49キロ、86・61・88の健康的なボディ。

俺は、彼女の目隠しをはずした。潤んだ大きな切れ長の眼が、おびえたように俺を見上げ、あっと喉の奥で叫んで顔を背けた。俺は、ズボンのファスナーを下げ、隆々と勃起したペニ

スを、彼女の鼻先につきつけていたのだ。

「くわえろ」

俺は押し殺した声で命令した。

「え」

彼女はとまどったように俺を見た。

「フェラチオだよ、知ってるんだろ？」

彼女は眼に涙をため、必死で首を振った。俺は容赦なく、彼女の艶やかな黒髪をつかみ、その美貌を俺の股間に押しつけ、むりやり、赤くふくれあがった男根を唇につっこんだ。

俺はゆっくりと腰を前後に動かし始めた。

「舌で嘗める。おまえもちゃんと顔を動かせ。歯を立てるなよ」

俺は感情のない声で支持を出した。最初はひどくごちなく、時々先端が喉にあたって、苦しげなうめきもれた。息が乱れ、ついに彼女は口からペニスを吐き出した。荒く息をしながら、苦しげにあえいでいる。俺は、また彼女の髪の毛をつかんだ。

「勝手に途中でやめちやいかな」

彼女は恨みのこもった眼で俺を見上げ、再び、俺のものをくわえた。だが、感情とは別の部分で彼女の身体は、まだ経験したことのない愉悦への期待で、あつく火照っているのは明らかだった。やがて、彼女は自分から積極的に舌を動かし始めた。快楽が急激に俺の下半身

を包み始めた。

「いいぞ、その調子だ」

俺の声がうわずった。睾丸がふくらみ、欲望が出口を求めて蠢き始めた。

「もつと早く……」

彼女はリズムミカルに頭を前後させて俺に奉仕した。ついに欲望は破裂した。俺は、彼女の口のなかに大量の精液を吐き出した……。

冷たい汗が、薄汚れた布団をぬらしていた。

俺は、虚脱した表情で、天井から垂れ下がった古びた蛍光灯を見つめ、やがてもぞもぞと体を起こし、腹部にこぼれた白い液体を拭った。

時計の針が七時半を指していた。俺はのろのろと下着をはき直し、布団から這い出た。2LDKの賃貸マンション。男の一人住まいには十分だった。妻は三年前、「あなたは自分のことしか見ていない人なのよ」と捨てざりふを残して去った。セックスレスだった俺たち夫婦の間に子供はできなかった。

俺がここに引っ越してきたのは三ヶ月前のことだ。その当時、俺はすさんだ生活のなかで会社に出勤している時間以外は、ほとんどパソコンと向かい合って過ごしていた。たまたま中古のノートパソコンを買ったときのことだ。ハードディスクに残っているデータを復元させるソフトを

購入し、以前の持ち主のプライバシーをのぞき見る行為にふけていた。前の持ち主はどうやら、不動産関係の仕事をしていたらしい。ほとんどは仕事上のメールやデータだけだった。たまた、卑猥な画像や不倫メールなどが混じっていた。膨大なファイルからそういったデータを見つけたときは、宝物を掘り当てたみたいで、心が躍った。

そうしたデータのなかに、顧客名簿があった。自分が斡旋した顧客の住所の一覧が載っていたのだ。そのなかに、そいつが斡旋したクライアントの住所一覧があった。そのなかに、芸能プロダクションらしい名前があり、(吹石)と注釈がついていた。俺は、インターネット検索でそのプロダクションを検索し、その注釈が、高校を卒業して上京してきたばかりの端正な容姿の美少女アイドルを意味することを知った。

俺は、ネットや雑誌で、彼女をチェックするようになった。見れば見るほど、彫りの深い美貌や、かたちのよさそうな乳房、すんなりと伸びやかに発達した四肢に夢中になり、夜な夜な、彼女を犯す妄想に耽るようになったのだ。

さいわい、独身で身軽だった俺は、ついに彼女が住んでいるマンションに引越した。たまたま、彼女の隣室が空いていた。俺はためらわず、

「そこにしよう」

と即金で契約したのだった。

入居してしばらく、彼女と鉢合わせするなんて幸運には恵まれなかった。ある朝、まだ午前四時前だった。隣のドアを激しくノックする音が響き、俺は目を覚ました。はっとして玄関に出て、ドアに耳をくっつけた。

「ほら、遅れちゃうでしょ。今日は早出だってあれほど言ったのに」

中年らしい女性の声だった。

「はあい、いまいきま〜す！」

その返事は、間違いない、隣室に住むあのアイドルの声だ。

やがて、ドアが開く音、女性マネージャーの叱責や促し、二人分の靴音がやかましく響き、やがて遠ざかった。

俺は、そっとドアを開けた。彼女の部屋の前からは、すでに人影は消えていた。だが、ドアの真下に、何か光るものが落ちているのに気づいた。

俺は、手を伸ばしてそれを拾った。かわいらしいキャラクターもののキーホルダーだった。鍵は一個だけついていた。俺は、おそろおそろ、それを、鍵穴に差し込んだ。

がちり。手応えがあった。

なんてこったろう。急いでいて、鍵を落としてしまったに違いない。俺は、鍵を引き抜くと自室に戻り、鍵を彼女のキーホルダーから外して俺のキーホルダーに移した。彼女のキーホルダーは出勤時に駅のゴミ箱に捨てた。

以来、俺は早寝早起し、出勤時間ぎりぎりまで耳を澄ませ、彼女が外出するのを待つようになった。鍵を初めて使ったのは、拾ってから一週間後だった。やはり朝五時前、女性マネージャーが迎えに来た。

俺は意を決して彼女の部屋のドアの前に立った。人けのないのを確かめてから、鍵穴に鍵を差し込み、回した。そして、ドアをそつと押した。

ざいと音を立ててドアが開いた。

彼女の部屋は、割合にきれいに整頓されていた。玄関の脇にある四畳半ほどの洋間がベッドルームだった。シングルベッドの上には毛布が乱雑に置かれ、シーツは乱れて彼女の寝汗を吸い込んでいた。ベッドの足下に、パジャマ代わりに着ているのだろう、裾長のTシャツが放り投げられたままだった。クローゼットの引き出しが半ば開いていた。彼女の下着が詰まっていた。

俺は、彼女のベッドに身を横たえ、自分の下半身をまさぐった。だが、何時彼女が不意に戻ってくるかもしれないと思うと集中できず、結局、自室に戻り、あらためて自慰に耽った。

そんなことを何度か繰り返すうちに、俺はしだいに大胆になった。ついに、彼女の部屋で射精したのは、三度目に侵入したときだった。四度目は、バスルームの脱衣所に落ちていた彼女の下着を嗅ぎながらペニスをしごいた。

彼女の不在が確認できないときは、こつそり寝室にしかけた盗聴器を聴いた。仕事場からまっ

すぐ帰宅することが多い。彼女は風呂に入り、ちゃんと洗濯し、ときには台所で料理し、テレビを見たりゲームをしたり、実家や友人と電話でおしゃべりしたりと、まじめな生活を送っているようだった。

だが、ときに夜遅く帰ってきて、そのままシャワーを浴びると、倒れ込むようにベッドに横たわることもあった。彼女の携帯に電話が入り、マネージャーに弁解しているような口調から、どうも他人に知られたくない外出だったようだ。俺は、彼女が見知らぬボーイフレンドに抱かれ、恍惚となって喘ぐ様子を妄想しながら、右手を動かすのだ。雑音にまじって、ときに彼女のため息が聞こえてくる。そんなときは、彼女が自らの指で、あの健康的な体の疼きを慰めているものと決めつけて、そのイメージを脳裡でふくらませながら、固くなった俺のものをなだめるのだった。

あの日、俺は彼女が外出したのを確認した後、例によって部屋に忍び込んだ。まず洗濯機をのぞいてまだ洗っていない彼女の下着やシャツ、スカート等を拾い出し、それをベッドの枕元に広げる。彼女の匂いに包まれながら、俺はズボンとトランクスを脱ぎ捨て、ベッドに仰向けになった。

彼女の部屋に入った瞬間から、俺のペニスは痛いほど勃起していた。俺は眼を閉じ、陶然として次のような物語を脳裡で展開していた。

俺に性の手ほどきを受けた彼女は、今や俺の手から巣立ち、奔放で淫蕩な女に成長している。俺は、彼女が若い魅力的な少年を部屋に引き入れ、巧みに誘惑する様子を、隣室から覗いているのだ。

「大きいのね……」

彼女はベッドに並んで腰をおろす男の股間を巧みにズボンの上から愛撫する。まだ女を知らない少年は、顔を真っ赤にし、上気して体をこわばらせている。そんな少年を彼女は巧みにリードする。

「さわってもいいのよ」

少年の手を取り、自らの乳房へ、そして股間へと導く。少年は夢中になって彼女にキスし、乳房をもみしだきながら、そこらじゅうをなめ回す。彼女は笑いながら不器用な少年の愛撫を受け止め、そして耳元でささやく。

「私が気持ちよくしてあげようか」

少年はどきりとしたように顔をあげ、彼女を見つめる。彼女はゆっくりと唇をなめながら片手で彼のペニスを愛撫しながら、片手で少年のシャツを脱がせる。そして、少年の乳首に唇を寄せる。

あ、ああっ……。少年が思わずうめく。俺が何度も調教した成果が発揮されているのだ。

「もっと気持ちいいこと、してほしい？」

彼女が顔をあげ、挑発するように微笑みながら言う。少年は夢中で顎を上下させる。

「じゃ、してあげる」

彼女はひざまずき、少年のズボンのジッパーをおろし、破裂せんばかりのペニスを引っ張り出し、唇を寄せる……。

「誰！」

悲鳴とともに、俺の妄想は中断された。

「きゃあああ！！！」

悲鳴をあげたのは俺のほうだった。

寝室のドアのところに、まごうかたない、この部屋のほんとうの住人が立っていたからだ。野球帽、地味なヨットパーカー、グレイのジーンズ、お決まりの「おしのび芸能人」スタイルだが、大きく見開かれた眼、半ば開いた官能的な唇は、まさに、彼女だった。

「す、すいません！」

俺はあわてて立ち上がった。彼女は息をのみ、唇を両手でおおった。

「あ、あの……すぐ出ますから」

俺は、小走りに玄関に向い、外に出ようとして、はっと気づいた。

俺は、下半身は裸のままだった。まだ興奮さめやらないペニス、間抜けにも屹立したままだったのだ。

俺は振り向いた。彼女は、寝室のドアのところで、じっとこちらを見つめていた。恐怖のあまり、金縛りになっっているようだった。

彼女のベッドには、俺が敷き並べた彼女の下着が散らばっている。そこで俺が何をしていたのか、彼女は見てしまっている。不法侵入、わいせつ物陳列罪。彼女が俺を訴えれば、俺の社会的生命は崩壊する……。

「あ、あの……」

俺はわめくように言った。彼女は恐怖に満ちた表情で後ずさった。

「ぜ、絶対に誰にも言わないでください」

え、というふうに、彼女は眉をひそめた。

「そのかわり、絶対に秘密にしますから。俺も言いませんから。それに、す、すぐに引越しますから。だから、内緒にしておいてください。ほんとに、二度と目の前には現れませんから。お願いします！」

彼女は、俺を見つめたまま応えなかった。だが、俺が彼女を説得しようと歩み寄ろうとしたとき、彼女はまた後ずさり、がたがたと震えだした。

「お願いします。一言うんといってください。とにかく、このことをばらされたら、困るんです。

ほんとに、何もいませんから。あなたの部屋のものを盗もうとか、あなたに何かしようとか、そんな下心があったわけじゃないんです。ほんとです。信じてくれますよね」

俺はあきらかに錯乱していた。彼女が、自分の寝室に忍び込んでオナニーしていた男の言うことなんか、信じるはずがないではないか。

だが俺は、彼女にうなずいてもらいたい一心で、なんと台所に飛び込み、包丁を探し出して彼女に突きつけたのだ。彼女の頬から血の気が引き、長い脚が大きくわななきはじめた。

「頼む、頼むから、絶対に言わないと約束してくれ！ このとおりだ！」

こんな台詞を、俺は彼女の胸元に包丁の切っ先を突きつけながら吐いたのだ。彼女の眼から涙がぼろぼろとこぼれはじめた。

俺はついに、包丁を持たない手で彼女の肩をつかみ、強くゆすぶった。

「このとおりだ！ 言わないと言え！ 言え！」

その拍子に、俺のペニスの先端が彼女の太股のあたりにふれた。彼女は悲鳴をあげた。そして、いきなり肩に乗せた俺の腕に強くかみついた。

「いてっー！」

シャツの上から、彼女の歯が食い込んだ。俺は思わず手を離れた。次の瞬間、股間から下腹部にかけて思い衝撃が突き上げられた。

彼女が、膝で俺の股間を蹴り上げたのだ。

目の前が一瞬真っ暗になった。呼吸が止まった。

「て、てめえ……」

床にしゃがみこんでいた俺がやっと我にかえるまで、おそらく一〜二分はかかったろう。睾丸が熱を帯びたようにわななき、下腹部の筋肉が引き連れたように痛んだが、なんとか立ち上がった。

顔をあげた瞬間、痛みも吹き飛んだ。彼女は、まさに玄関のドアを開けようとしていたからだ。

「やめろ！」

俺は、彼女の腰にタックルした。二人同時に仰向けに倒れた。彼女の大きな体が俺の上でばたばたともがいた。

俺は彼女を押しのけ、ドアに背中をくっつけて両手を広げた。

「絶対に外には出さない！ 誰にも言わないと約束するまで、出さないぞ！」

野球帽が脱げ、ポニーテールにしていた彼女の髪は、ゴムがほどけたのか、乱れに乱れて肩を覆っていた。大きな腫がじっと俺を見つめていた。唇が半ば開き、肩が大きく上下していたが、さきほどのような恐怖感は何えなかった。

「……どいてよ」

彼女は押し殺した声で言った。

「なんだと」

「冗談じゃないよ……なんで、そんな約束しなきゃならないのよ……」

「だって、約束してくれないと、俺が困るじゃないか」

「うそ……!!」

彼女はあきれたように呟いた。

「信じられへん……、何、開き直ってんのや、このおっさん……」

口調が関西弁になっていた。彼女は奈良の生まれなのだ。

「おっさんとはなんだ！」

俺は怒鳴った。すると彼女は、血相を変えて言い返した

「だって、そやろ？ 他人の部屋に勝手にあがりこんで、へんなことして、包丁まで持ち出して、ただですむと思ってるん？ あほやないの？ 女の子や思うて、なめんといて！」

言い終わって、彼女ははつとしたように口をつぐみ、再び恐怖感に包まれた表情を見せた。俺の表情は、自分の意志とは離れたところでこわばり、眼が陰悪な色を見せていた。

実際、俺は現実と夢の狭間にいた。俺は確かに、下半身裸で、妄想のなかで犯しつづけてきたアイドルと対峙している。だが、自分の体も心も神経も自分のものでないような、ふわふわとした感覚のなかに俺はいた。

俺の脚が一步前に出た。

「な、なんやのん！」

彼女は叫び、両手をあげて構えた。

「うち、空手習うたことあるんやで！ ほんまやで！ 怪我したくなかったら、そこ通して！」  
プロフィールにそんなことが書いてあったな、と俺はぼんやりと思った。どうしていいか分からなかった。彼女は絶対に、口外しないと約束してくれそうにない。どうしたらいい？ このまま犯罪者の道突っ走るのも一つの手だな、とふと思った。俺はおしまいだ。どうせなら、いい思いをしておいたほうがよくないか。妄想を妄想として終わらせてしまうのはもったいなくないか。

これまで脳裡に描いていたイメージが蘇った。この美少女を膝まずかせ、ペニスをなめさせ、たっぷり顔に射精しておいて、無理矢理犯す……。

とたんに、きええい、と空気を切り裂くようなかけ声とともに、ぶうんとうなりをあげて彼女の足が飛んできた。足の甲が、俺の太股の裏あたりにヒットした。

「わっ！」

鋭い痛みが俺を現実には戻した。右脚の感覚が失われ、俺はよろけた。つづいて、顔面に重いものがたたきつけられ、意識が弾け飛んだ。俺は、後ろ向きに回転し、壁にたたきつけられていた。

彼女の回し蹴りが、俺の頬に決まったのだ。

立ち直る暇はなかった。右腕が後ろにねじあげられた。骨が折れるかと思うほど痛かった。

「ててて……なにしやがる！」

俺はわめいた。だが、彼女は聞く耳もたず、ますますねじりあげた。俺は苦しくなって腰を曲げ、上半身を傾けた。

「えい！」

彼女がねじあげた俺の腕を、俺の背中に押しつけた。俺は、今度は腹を突き出し、のけぞった。びくりとも動けなかった。

「はあっ！」

つづいて地獄の苦しみが襲ってきた。

彼女は背後から、俺の股間を何度も何度も蹴り上げたのだ。蹴り上げられる度に、むき出しの睾丸はゴムのように変形し、俺の足裏は床から離れ、体が宙に浮いた。全身が麻痺し、焼けるような痛みが下半身を覆い尽くし、胃から嘔吐がこみ上げた。

やっと解放されたとき、俺は紙くずのように床にうつぶせになり、両手で股間を押さえ、すすり泣きながら這いつくばった。どくんどくと大きく脈打つ茹でられたような睾丸からペニスの先端に向かって、激しく熱いものが逆流していった。掌がぐしょぐしょに濡れた。

片手を股間から離し、顔に近づけた。

血だった。



睾丸が内出血したのだ。いや、すでに潰れているかもしれない。  
俺は恐怖と激痛と絶望に号泣した。

「……空手がこんなところで役に立つとは、思わへんかったわ」

彼女は放心したように、冷たくつぶやいた。

「う……………」

「泣いたってあかん。警察に言うで。あんた牢屋行きや。正当防衛やもん」

「……………お、俺は」

「ン、なに？」

絶対的優位に立って、彼女は落ち着き払っていた。

「約束さえしてれたら……何もしないで帰ったのに……乱暴なんかするつもりはなかったのに……」

……

「また、身勝手なこと言うてる」

彼女は不機嫌な声を出した。

「ひよつとして、自分の事しか考えられへん人ぢやうの？」

どこかで聞いた台詞だった。

彼女はつかつかと歩み寄り、うつぶせになった俺の股間からはみ出している陰囊にかかるとを乗せ、体重をかけはじめた。鋭い激痛が全身を駆けめぐり、筋肉という筋肉が緊張した。

地獄の業火に焼かれながら、俺は去っていった捨て妻の台詞の続きを思い出した。

——あんたみたいな人を、男の腐ったようなやつだっというのよ。

今や俺は、腐った男以下になりはてようとしている……。

私は、うつぶせになって苦しみ悶える男の、脚の付け根からはみ出している真っ赤に腫れ上がった玉袋に踵を載せた。  
軽く体重をかける。

「ううっっ!!!」

ストーカー男が苦しげに鋭くうめいた。左の頬を床にくっつけて、横顔を見せていた。年のころは三十代半ばだろうか。改めて見ると、真面目そうな、やり手のサラリーマンといった風貌だ。

シャツの裾がめくれ、お尻から背中にかけてむき出しになっている。何かスポーツでもやっているのだろうか。たるみのない、引き締まった体をしている。

サイン会などにやってくる、ひ弱そうな、おたくっぽい男たちとは違う。

現場でマネージャーに紹介され、いつも頭を下げて「お願いしま〜す」と挨拶すると、うんうん、と鷹揚そうに頷きながら、実はしげしげと私の服装の中身を吟味しているような種類の男たちに近い。

そういう男が、歯を食いしばり、堪えきれない痛みで涙を流している。

私はちよつと足をあげ、今度は玉袋を爪先で軽く蹴ってみた。ぶにっとした感触。ゴムを

蹴ったような反動があった。

「ひっっ!」

男がまた、泣くような悲鳴をあげ、体を痙攣させた。お尻を持ち上げ、体全体を縮こませ、身を守ろうとしているようだ。

両手で玉袋をガードしているけれど、じかに触れてはいない。自分で触れないくらい痛いのだろうか。

私は、足の甲で蹴り上げた。男の手の甲を蹴り上げたかたちになったが、十分な衝撃は与えたのだろうか。「ぎゃあっ!〜!〜!」と男は呻き、ますます丸くなった。

きやははっ。

私は思わず笑ってしまった。

こいつは犯罪者だ。これは正当防衛なんだ。金的を攻撃したのは初めてだけど、見たところ、当然、立ち直れそうにもない。

何をしてもいいんだ。

そう思ったとたん、性器がじゅっと濡れた。

大の男を打ちのめし、這いつくばらせ、地獄のような苦しみを与える。

なんて、いい気分なんだろう。

私は、このストーカーがいとおしくさえなった。

「ねえ」

私は、男の頭のかたわらに膝をつき、頭髪をつかんで無理やり顔をあげさせた。

「は、はい……」

苦痛に顔をゆがめながら、男は眼で哀願した。

「名前、なんていうの？」

「お、お願いです。警察にだけは……」

丁寧な口調が、ますます私の優越感をくすぐり、同時に、体の疼きが増した。

「正直に白状したら、警察には内緒にしようとしたるわ」

私は優しく言った。男はまた眼から涙を溢れさせた。

「で、名前は？」

「大島裕一です……」

「おおしま、ゆういち。どこに住んでるの？」

「と、隣です」

「隣？」

「ええ……」

「隣って、まさか同じマンションの？」

「はい……」

「ここに住んでるのが、私やって分かって、忍び込んだん？」

「はい……」

「ひょっとして、私がここに住んでるから、わざわざ引越してきたん？」

「そうです……いてててて」

男の髪の毛をつかむ手に、次第に力がこもってきた。

「私のファンやから？」

「……う……そ、そうです……」

「鍵はどうやって？」

「こないだ、あなたがドアの前に落としたのを……」

「あんときか……それからちよくちよくここにきて、オナニーしてたってわけ？」

「……」

「正直に言いなさい！」

私は手を伸ばし、男の股間にぶらさがった玉袋をきゅっとつかんでひねってやった。

「ああああ!!!!!!」

男は悲鳴をあげ、苦しげに顔を左右に振った。

すごい、こんな痛そうな顔、みたことない。

私はすっかり嬉しくなった。他人を、しかも強そうな男を苦しめることが、こんなに快感

だったなんて。

ふと、手首に固いものがふれた。

男のペニスだ。勃起したままだった。

すっごく痛いはずなのに、どういう構造なんだろう？

一度、冗談で指ではじいてみたことがある。すっごく怒られた。使えなくなるんだぞ、と叱られた。

でも、この男は勃起している。

私は俄然、好奇心が湧いた。

「仰向けになって」

私は男の玉袋から手を離して、そう言った。男は、恐怖に満ちた目で私を見返した。仰向けになって、股間を無防備にさらすことにおののいているようだった。

「言う事きけへんの？ 潰すよ！」

自分でもびっくりするくらい、ドスの聞いた脅し文句だった。男は慌てて、辛そうに体を仰向けにした。

ペニスが、直角に天井を向いて勃起していた。私は、そっとそれを掴んだ。

日焼けしたような皮膚のそれは、血管から脈が聞こえてきそうなくらい、いきりたっているのが感じられた。

私は、ゆっくりとペニスを握った手を上下させはじめた。

男が不安そうに、顔をあげて私を見守っていた。私は、じっと男の顔を見つめてやった。男の眼が潤んでいた。唇が半ば開き、息づかいがしだいに荒くなっていた。目がしだいに細くなっていた。

興奮している男の人の顔を見つめるのが好きだった。男は顔を背けた。見つめられるくらい恥ずかしく、興奮することはない。男のひともそうなのかしら。

私は、手の動きをはやめた。ペニスの先端が濡れていた。男は後頭部を床にくっつけ、こちらを見ないようにして、眼を閉じ、荒く呼吸している。胸部や腹筋が激しく上下していた。

そろそろ、かな……。

私は片方の手の拳を握りしめ、思い切り、玉袋に打ち込んだ。

「ぎゃああああ……！！！」

男は絶叫した。同時に、ペニスの先端から白い液体が噴出した。びっくりするくらい、大量に射精した。あやうく顔にかかりそうだった。

男は、体をくの字に曲げ、体を激しくゆさぶって悶絶していた。私は思わず、脚をきつく閉じ、両手で股間を抑えた。恥ずかしいくらい、濡れていた。

「もう帰って、ええよ」

声がうわずっていた。私は、寝室に戻り、男のズボンとトランクスを拾い上げ、廊下で悶

絶している男に投げつけた。

「誰にも言わへん。そのかわり、ちよくちよく、玉、蹴らせて」

立つこともできないでいる男を強引に引きずるようにして、隣の部屋に押し込むと、私は自分のベッドに倒れ込むようにして寝そべり、自らの敏感な場所をまさぐりはじめた……。

そこで妄想は途切れた。

彼女に股間を蹴られ、撃退されてから三日目。まだ、痛みはとれないでいる。

あの日、すさまじい激痛に失神した俺は、気がつくとな自分の部屋で唸っていた。会社には病気になるということで休みをとった。

食欲はまったくない。水しか飲んでいない。血の小便が止まらない。彼女が警察に訴えたかどうかは知らない。

ただ、俺は、新しい「趣味」をひとつ、手に入れたようだ。